

(端裏書)

「尾崎氏江中井より參候

御状案文」

以別紙得貴意候、然ハ深田三郎右衛門
家之義往古六拾石御米御下札

二而頂戴仕來り候所、其後御取放二

相成居候二付一、代々此儀

難忘殘念二奉存候得共

御時節柄奉恐察、又

折も無御座候二付一自然

打捨置候旨然ル處昨年

御用金被仰出候節

右内願も御座候故畢竟

其義蒙仰度相含

身分不相応二三百両

第一番二差上ヶ段々

御用筋相勵候由之所

此度外並合二御役付

御帷子御上下等拝領

被仰付候二付一難有仕合

二者奉存候得共前文之通

内願御座候義不被

仰付候故無拋乍恐

頂戴之御品御内々

御断申上度飛脚を以

一両日已前其御表へ

申上候旨右二付一何卒

御声計二而茂

宜御座候間往古之通

六拾石被仰付候様

若又其義難被為

御義御座候ハ、御夫持

又者御支配二而も

不被仰付候而者昨年

格別ニ御用金出精

申上候御趣意も相立

不申至而奉恐入候由

同者旧願之通

御懸声計ニ而も

六拾石被仰付候得ハ

対先祖勤功相立

千万難有仕合奉存候

尤右等之義三郎右衛門

手堅キ生質故

御歎等恐入極内□□

申上兼候得共何卒

両度御内用相勵

差上候義御不便ニ

被為思召乍恐御序

も被為在候ハ、從

御前御根取様江

御内々御咄被遊三郎右衛門

内願之筋被仰付候ハ、

冥加至極難有仕合

可奉存旨大谷新九郎より

私江迄極内相歎申候

此段与得御堅慮

被成御序之節

御前へ御内々御詞

御取計被成候ハ、

御聞届也可被遊哉

此段御内談仕候、若

御前より御根取様迄

御頼被遊三郎右衛門内願

通成就仕候得者

又、右御内用等相応之

儀者追々出精相勵

申上候様新九郎より取計

三郎右衛門より為差出

可申旨内咄し候御事ニ

御座候、左候得者畢竟

御手元御為筋_与奉存候間

急々御内々御詞之義

御取計被成可然

奉存候、右大極内為可得

貴意如此御座候、以上

十二月十二日